

タイトル

「ぼくらはみんな生きている ～いたばし新清寮物語～」

ジャンル:ヒューマン

上演時間:約2時間

登場人物

米山次郎(45)更生保護施設「いたばし新清寮」の寮生。アルコール依存症が原因で、ひき逃げを起こした。

青木充(28)「いたばし新清寮」の寮生。元覚せい剤の密売人。

辰巳昇三(44)「いたばし新清寮」の協力雇用主、辰巳建設社長で、元寮生。

新田和夫(50)「いたばし新清寮」の施設長。

国光颯太(40)「いたばし新清寮」のベテラン補導員。

小島卓也(34)「いたばし新清寮」の新人補導員で、颯太の甥。

丸岡正(42)「いたばし新清寮」の寮生。アルセーヌルパンの再来と言われた元大泥棒。

平尾勝司(33)「いたばし新清寮」の寮生。超アガリ症の元マジシャン見習いで、元スリ。

蔦谷慎次(38)「いたばし新清寮」の寮生。極小暴力団・荒川組の元組員。

三崎洋介(26)「いたばし新清寮」の寮生。中卒の元チンピラ。慎次を兄貴と慕う。

マリリン(35)「いたばし新清寮」の寮生。歌舞伎町「ZOO倶楽部」の元ナンバーワンオカマで、振込め詐欺団の元使いっ走り。本名・早川 剛三。

林健一郎(34)「いたばし新清寮」の寮生。東京大学卒の元結婚詐欺師。

窪田良(30)次郎に妻と娘をひき逃げされた被害者。

窪田里香(24)良の妹。

青木真砂子(52)充の母親。充を金づるだと思っている。

男:13名

女:2名

計15名

第一幕第一場

明るく楽しげな音楽が流れる場内。

ポップでファンキーなブルースが流れてくると、次第に客席の明かりが落ちていく。

暗転。

真っ暗な中、ブルースのリズムに合わせて童謡「故郷」のリコーダー合奏が始まる。(あまり上手くない)

徐々にバックのブルースが消え、リコーダー合奏のみとなり、舞台上に明かりが入ってくる。

更生保護施設「いたばし新清寮」集会室。

昔の小学校の教室を思わせるような室内。

上下の奥に出入り口があり、下手奥の出入り口は一段高くなっている。

辰巳昇三(44)の指揮の元、丸岡正(42)・蔦谷慎次(38)・三崎

洋介(26)・マリリン(本名 早川剛三)(35)・林健一郎(34)・平尾勝司(33)の6人の男が、一生懸命というか、鬼のような形相で、真剣にリコーダーを吹いている。

音程がずれたりテンポが狂ったりするが、最後の「ふるさと～」のフレーズのところだけは何とか合い、合奏を終わらせる。

合奏が終わった途端、昇三以外全員が、何かをやり遂げた！ という、ものすごく満足げな顔になり、フ～っといっせいに額の汗を手の甲でぬぐう。

全「ふ～」

昇三「(一瞬の間のあと)ふ～じゃねえよ。ふ～じゃあ！ 何満足げな顔してんだよ。全然合ってねえじゃねえか」

正「そうか？ 結構がんばってたと思うけどな」

マリリン「そうよ。なかなかよかったわよ」

健一郎「特に最後のとこなんて、いい感じに仕上がってたと思いますけど」

昇三「最後だけ合っててもしょうがねえだろ」

慎次「全然合わないよりまだろ？」

洋介「さすが兄貴！ いいこと言うなあ」

慎次「(照れて)そうかあ？」

洋介「俺が見込んだ兄貴なだけはある！」

慎次「(ますます照れて)褒めても何にもでねえぞ」

呆れたように首を振る昇三。

昇三「バカかお前ら。イヤ、バカだろお前ら」

洋介「なんだと！ いくら辰巳さんでも言っていいことと悪いことがあるぞ！」

健一郎「人間、本当のこと言われると怒るっていうのは、どういうメカニズムなんでしょうねえ」

洋介「なんだと！」

健一郎「ほら、バカの一つ覚えみたいに同じセリフ」

洋介「なんだ(ハッと気が付き、言葉をにごす)・・・ケンカ売ってんのかよ、林」

健一郎「ぼくはケンカなんて下品なことにはしない主義でね」

洋介「本当に、めちゃくちゃむかつくなお前」

慎次「やめろ洋介」

洋介「だって兄貴！ こいつ自分が東大出身だってこと鼻にかけて、中卒の俺のことバカにしてんですよ」

慎次「いいからやめとけて。そんなセコイ結婚詐欺師の言うことなんて聞く必要ねえ」

健一郎「セコイとは聞き捨てなりませんね。ヤクザやチンピラの方がよっぽどセコイと思いますけどね」

洋介「なんだとこら！」

マリリン「もう！ あんたたちいい加減にしなさいよね。時間ないのよ、わかってるの？」

昇三「(大きくなづき)剛三の言うとおりで」

マリリン「ちょっと辰巳さん！ 本名で呼ぶのやめてよね」

昇三「ああ、すまんすまん。え〜と、なんだっけ？」

マリリン「マリリンよ！ もういい加減に覚えてちょうだい。歌舞伎町のZOO倶楽部のナンバーワン・マリリン！」

勝司「ZOO倶楽部？」

マリリン「そう、歌舞伎町のゲイバー。動物のキグルミショーが有名なお店なの。あたし象のキグルミ着て踊ってたのよ。超可愛いって有名だったんだから」

勝司「象のキグルミ…ですか」

マリリン「そう！ ここ出たら一度行ってみなさいよ。超ハマるわよお」

勝司「はあ…」

マリリン「今地図書くわね。ちょっと待ってて」

昇三「マリリン！」

マリリン「なあにい？」

昇三「地図書いてどうすんだ」

マリリン「どうって、この子が店に行きたいっていうから」

勝司「(小声で)言ってませんけど…」

昇三「お前なあ、なんのために今ここにいるのか忘れてるだろ」

マリリン「(ハッと気が付き)そうだった！ リコーダーの練習だったわね」

昇三「(呆れきって)全くお前らは揃いも揃って…」

深くため息をつく昇三。

昇三「いいかお前ら、本番まであと3ヶ月しかないんだぞ。全部でリコーダーの合奏を3曲仕上げなくちゃいけないうえに、他にもいろいろ準備することがあるだろ。勝司はマジックだし、洋介と慎次は漫才」

慎次「なあ辰巳さん」

昇三「なんだ？ 慎次」

慎次「前から聞いたかったんだけどさ、何で俺たちが老人ホームの夏祭りで、リコーダーの合奏とかマジックとかやらなきゃいけないのよ」

洋介「(うなづいて)そうだよ、兄貴の言うとおりでだよ。何でそんなダッセエこと、俺たちがしなくちゃいけないんだよ」

昇三「お前らなあ、そんなこといちいち言わなきゃわかんねえのかよ」

洋介「…わかんねえよ、なあ兄貴？」

慎次「…ああ。まあな」

マリリン「(ため息混じりに)あんたたちって、本当にバカなのねえ」

洋介「なんだと？」

マリリン「ボランティアに決まってるじゃないの。ねえ辰巳さん？」

洋介「ボランティア？ 俺たちが？」

昇三「ああ、そうだ」

昇三の言葉に、キョトンとする洋介たち。呆れたようにまたため息をひとつ吐く
昇三。

昇三「いいかお前ら、…いや、他のみんなもいい機会だからよ〜く聞いとけ。ここいたばし新清寮
での心構えってものを教えてやる」

勝司「心構え…ですか？」

昇三「(うなづいて) そうだ。お前らは、自分たちの立場ってものがわかってねえ」

健一郎「立場？」

昇三「そうだよ。立場だ。…いいか？ お前らはな、み〜んな前科者だ。一般社会からはみ出し
た厄介者なんだよ。そこんところを忘れてるんじゃないかねえのか？」

洋介「…なんだよそれ」

昇三「黙って聞け」

洋介「…」

昇三「丸さんよ」

正「ん？」

昇三「あんたは確か、その世界じゃあちよつとは知られた大泥棒だったよな」

正「えっ？ ああ…まあな」

昇三「アルセーヌルパンの再来なんてことを言われてたらしいじゃねえか」

洋介「アルセーヌルパン？！ 丸さんが？」

正「もう20年近く前の話だよ」

昇三「田園調布じゃあかなり恐れられてた大泥棒だったんだよな」

健一郎「へえ…」

正「(ちよつと得意げに) 田園調布の防犯意識を高め、一帯をセコムのお得意さんにしたのは俺の
功績だな」

昇三「セコムと裏でつながってるんじゃないかねえかなんて噂があったくらいだ」

マリリン「嘘！」

正「嘘に決まってるだろ。ただの噂だよ」

マリリン「そりゃあそうよねえ。ああびっくりした」

正「セコムとは何でもねえ。ただ、感謝状はもらったけどな」

マリリン「感謝状？！」

健一郎「嘘ですよ？」

ふふつと意味ありげに笑う正。

洋介「マジで？」

昇三「(苦笑して) 冗談だよ。なあ丸さん」

正「(ニヤッと笑って) まあな」

洋介「何だよ冗談かよ。ああ…びっくりした」
昇三「それが冗談だとは思えないくらい、すごかったってことだよ」
勝司「(感心しきりで)へえ…」
慎次「そりゃあすげえなあ…」
昇三「でもな、そんな丸さんだって、世間様から見ればただの窃盗犯だ。違うか？」
正「…いや、違わねえよ」
昇三「慎次はヤクザで、洋介も同様。マリリンは男に騙されて、振り込め詐欺集団の使いっ走りだったな」
マリリン「…イヤなこと思い出させないでよ」
昇三「勝司は元マジシャンの腕を生かしてスリ」
勝司「ええ、まあ…」
昇三「俺だって、ここを退寮してもうじき5年になるが、前科者だってことは生涯変わらねえ。…い
いか、俺たちはな、はっきり言っちゃえば、世の中の厄介者なんだよ」
正「(苦笑して)まあ、そういうことだな」
昇三「でもな、いいか？ ここからが大事なところなんだが」
マリリン「何よ」
昇三「そんな厄介者である俺たちに対して、ここいたばしの皆さんが、どれだけ親切に接してくだ
さってるか、お前らはわかってるのか？ とてつもないほど暖かい、広～い心で俺たちを受け
止めてくださってるんだぞ」
健一郎「そこまでですかね」
昇三「道歩いてて何も感じねえのか？」
健一郎「別に」
昇三「お前思いっきり不感症だな」
健一郎「不感症？ ぼくがですか？」
昇三「そうだ。ここらを歩いて何も感じねえのは、不感症かバカだけだ」
洋介「じゃあこいつもバカなんじゃねえの？」
健一郎「中卒の坊やにバカなんて言われたくないですね」
洋介「中卒って言うな！」
健一郎「だって本当のことじゃないですか」
昇三「ああもう！ お前ら本当にうるさい！（健一郎を指差して）お前は不感症。（洋介を指差し
て）お前はバカで決まり！ いいな」
洋介「よくねえよ！」
健一郎「そうですよ。なんで凄腕の結婚詐欺師であるぼくが不感症なんですか！」
昇三「いいか！ いたばしの皆さんは、俺たちと道で会ったらコンニチハなんて言うてくださるだろ。
ニコッと笑いかけてくださるだろ？ 普通はな、自分ちの近所に、更生保護施設が建ってるなん
て、ものすごくイヤなもんなんだよ。なんせ昨日まで刑務所にいましたって連中ばかりだ。そ
れが当然の反応だよ。でもな、ここいたばしの皆さんはそうじゃない。俺たちを同じ地域住民と
して認めてくださり、地域清掃活動やら、ボランティア活動やらに誘ってくださるんだ。一緒にこ

の地域を盛り立てて行きましようなんて言うてくださるんだ。こんなすばらしい皆さん方の心意気を感じられないやつは、バカか不感症って相場は決まってるんだよ！」

マリリン「決まってるの…かしら？」

昇三「いいか！ これをありがたいと言わずに、何をありがたいと言うんだ？ そうだろ？ みんな！」

熱く宣言する昇三に、ちょっと啞然とする一同。

全「ハア…」

昇三「そんなわけで、3年前にここいたばし新清寮の施設長・新田先生がだな、自分たちもいたばしの方々のために何かがしたいとおっしゃって、2丁目の桜ヶ丘ホームの夏祭りに参加させていただけることになったんだ。老い先短い方々に、一時の楽しみを与えるそのお手伝いを、俺たちがさせてただけ！ こんなすばらしいこと他にないだろう。違うか？」

わかったようなわからないような、複雑な顔でうなづく一同。

昇三「このボランティアはな、今まで散々世間の皆さん方に迷惑を かけてきた俺たちが出来る、ほんのちっちゃな恩返しなんだよ。わかるよな？」

正「辰巳さん」

昇三「ん？」

正「それはなんとなくわかったけどな」

昇三「けど？」

正「俺あ前にも言ったけど、人前で何かするってのがものすごく苦手なんだよ。リコーダーの合奏なんて、大勢の前で賑々しく発表するんだろ？ どうにもこうにもなあ…」

昇三「丸さん！ 伝説の大泥棒がなに言ってんだよ。男は度胸だろ？」

正「裏社会での度胸は、それこそ余りあるほどあるんだが、表社会の度胸はからっきしなくなあ…」

洋介「そんなことよりよお、何で今時リコーダーなんだよ。俺はそこんところがいまいち乗れねえとこなんだよ。今時「故郷」って言われてもなあ…。どうせやるならロックとか永ちゃんとか、そんなのがいいんじゃないかと思うんだよ」

慎次「いいねえ永ちゃん！ 実は俺、ギター弾けるんだよな」

洋介「本当かよ兄貴！ 俺昔ちょこっとバンドやっててよ、ベースなかなかいけるんだぜ」

慎次「(ノリノリで)よし！ じゃあみんなで永ちゃんやらねえか？ 名前は文太バンド！」

勝司「文太バンド？」

慎次「ああ。菅原文太兄貴の名前をいただくんだよ」

健一郎「何で永ちゃんに文太なんですか」

慎次「どっちも格好いいからだよ。決まってるだろ」

健一郎「(呆れたように首を横に振って)心底センスないですね」

洋介「お前兄貴の言うことにいちいち文句たれてるんじゃないかよ」

昇三「ああもう！ お前らうるさい！ 文太も永ちゃんも却下！」

洋介「なんでだよ！」

昇三「いいわけないだろ、文太バンドで永ちゃんなんて」

洋介「どうして！ ふるさとより全然いけてるぜ」

昇三「いけてなくていいんだよ。っていうより、いけてちゃあいいねえんだよ」

慎次「どういうことだよ」

マリリン「あのねえ、老人ホームのジジババが、文太バンドで永ちゃん聴いて楽しいと思う？ ノリノリになるとでも思ってるの？ 騒々しいって思われるのがオチでしょ。第一怖いじゃないの。永ちゃん聴いてノリまくっちゃうジジババなんてさ。心臓発作起こして、死なれでもしたらどうするのよ」

慎次「…まあ…そうか」

マリリン「もっと相手の立場になって考えなさいよ。ジジババが本当に聴きたいのは、永ちゃんかふるさとか。ちょっと考えればわかるでしょ？」

ふてくされたように黙る洋介。

洋介「…」

洋介の肩をぽんと叩き、まあまあと笑う正。

正「まあまあマリリン。そこまで言わなくてもいいじゃねえか。俺も永ちゃん好きだしな」

洋介「だろ？ こいつオカマだから、永ちゃんによさがわかってねえんだよ」

マリリン「ちょっと、オカマって言わないでよ。あたしは女。オカマじゃないの」

洋介「うるせえ。剛三は黙ってろ」

マリリン「剛三って呼ばないでって言うてるでしょ！」

洋介「剛三剛三！ だっせえ名前！」

マリリン「何ですって！」

慎次「洋介！ ガキみたいなまねするな」

洋介「…」

慎次「いいな」

洋介「…わかったよ…」

昇三「わかったなら練習だ。いいな、みんな！」

各々が各々の気持ちで「は～い」だの「へ～い」だのと返事をし、バラバラの場所で練習し始める。

客席の間の通路から、いたばし新清寮の施設長・新田和夫(50)と寮生の米山次郎(45)が降りてくる。

昇三「新田先生！」

和夫「たっちゃん！ 来てたんですか！ そうか…夏祭りの練習今日からでしたね」

昇三「ええ」

次郎を気遣う昇三。

昇三「米山さんは、身体はもういいのかい？」

次郎「おかげさまで、だいぶよくなりました」

和夫「これからまた、練馬に行ってきますよ」

昇三「…そうですか。本当に身体大丈夫なの？ あんまり無理しない方がいいんじゃないの？」

次郎「大丈夫ですよ。体力には自信ありますから」

昇三「なに言ってるの。そう言って、がんばりすぎて倒れたんじゃないの」
次郎「(苦笑)まあ、そうなんですけど」
和夫「なるべく無理はしないように、私がちゃんと見てますよ」
昇三「…ならいいんですけど」
次郎「ご心配お掛けして申し訳ありません。明日からまた、仕事の方も復帰させていただきますから」
昇三「現場のことは気にしないでいいよ。洋介も慎次もよくやってくれてるし、ちゃんと身体治して、それから来てくれればいいから」
次郎「でも…」
昇三「大丈夫、クビになんかしないよ。ちゃんと米さんの場所をあけてあるからね」
深々と頭を下げる次郎。
次郎「ありがとうございます。社長」
昇三「いいっていいって。ほら頭上げて。こういうことはお互い様なんだから。全然遠慮する必要ないんだからね」
次郎「…はい」
マリリン「米さん！ これ米さんのリコーダーよ」
和夫たちの元を離れ、マリリンたち寮生に近づく次郎。
次郎「悪いなあ…。今日の練習付き合えなくて」
練習している寮生たちを、やさしく見つめる和夫。
和夫「実際助かってますよ、たっちゃん。うちの協力雇用主の中でも、辰巳建設さんには本当にお世話になっちゃって。あんたんとこがなかったら働き場所がないって連中、うちにはたくさんいるからねえ」
昇三「俺は新田先生のおかげでこうしていられるんですから。これからもどんどん言ってください。出来る限り協力させてもらいますから」
和夫「ありがとう、たっちゃん」
昇三「いえいえ。で、国光先生と榊のおばちゃんは？」
和夫「おばちゃんは厨房で夜の仕込みしてますよ」
昇三「国光先生は事務所ですか？」
和夫「府中に行ってもらってます」
昇三「府中。面接ですか？」
和夫「いや、今日からひとり入寮することになったから、迎えに行ってもらってるんです」
昇三「そうですか」
和夫「青木充と言って、今28歳なんだけど、早速たっちゃんに協力してもらってもいいかな」
昇三「(ニヤッと笑って)わかってます。そいつをうちでってことですね？」
和夫「もちろん本人が希望すればってことなんだけど、面接だけでもやってもらえると助かるなあ」
昇三「わかりました。本人にやる気があるなら連絡ください」
和夫「ありがとう。そうさせていただきます」
昇三「承知しました」

和夫「そうそう、たっちゃんにまだ、小島君を紹介してなかったですね」

昇三「小島？」

和夫「先週から働いてもらうことになった新人補導員がいるんですよ」

昇三「へえ。新人さん入ったんですか」

和夫「国光さんの甥っ子で、小島卓也って言うんです。今国光さんと一緒に府中に行ってもらってるんだけど、今度紹介するからよろしくね」

昇三「はい」

次郎「新田先生。そろそろよろしいですか」

和夫「ああ！ もうこんな時間か。じゃあたっちゃん、あとよろしくね」

昇三「はい。行ってらっしゃい」

和夫「じゃあ米さん、行こうか」

次郎「よろしくお願いします」

昇三「米さん、無理しないでね」

次郎「はい」

和夫「みんながんばって練習するんだよ」

マリリン「は～い！」

正「気をつけてなあ」

上手の出入り口から出て行く次郎と和夫。

正「…また練馬か。米さんもよく続くなあ」

昇三「実際頭が下がるよ」

正「全くねえ…」

昇三「…。ああ丸さん、俺、ちょっと榊のおばちゃんに挨拶してくるよ」

正「はいよ」

和夫たちが降りてきた客席の間の通路を通り、出て行く昇三。

勝司「丸岡さん」

正「なんだ？」

勝司「練馬って、なんですか？ 病院？」

正「ん？ いや…」

勝司「もしかして米さん、悪い病気かなんかですか？ ずいぶん寝込んでたみたいだし」

正「そうじゃねえんだよ」

慎次「被害者の家が練馬にあってな、毎週謝りに行ってんだよ」

勝司「…ああ。…米さんは何をしたんですか？」

健一郎「ひき逃げですよ」

勝司「ひき逃げ…」

洋介「2人死んだんだろ？」

正「まあ…そうみてえだな」

勝司「そっか…」

マリリン「謝罪、全然受け入れてもらえないんでしょう？」

正「ああ」

洋介「もういい加減諦めればいいのになあ」

正「そうはいかんだろう」

洋介「だって半年以上通ってるのに、家にも入れてもらえないなんてなあ…」

健一郎「それはまあ、当然といえば当然じゃないですか？ 被害者の人、即死じゃなかったんですよ？ 逃げないですぐに救急車呼んでればって、向こうは思うでしょう」

マリリン「プラス飲酒運転じゃあねえ…。米さんアルコール依存もあるみたいだし。身体の具合が悪いのもそのせいかしら？」

慎次「さあなあ…。でも最近目が霞むって言ってたな」

洋介「それは年のせいじゃねえの？ 老眼とか」

正「年って、米さんまだ45だぞ」

マリリン「立派に老眼年齢よ。ZOO倶楽部のママ、40で老眼になったって言ってたわよ」

正「あ～あ…ヤダヤダ。年は取りたくないねえ」

マリリン「丸さん42でしょ？ そろそろなんじゃないのお？」

正「…やなこと言うんじゃねえよ」

マリリン「(からかって)誕生日プレゼントは老眼鏡かしらあ」

正「くだらねえこと言ってねえで、さっさと練習しろ」

マリリン「(笑いながら)は～い」

改めてリコーダーの練習を始める一同。

徐々に明かりが落ちる。

暗転。

続きはあらすじ(ホームページ内 <http://www.supercomplex.net>)をご覧ください。